

## 人口減と高齢化の課題解決先進地をめざす

### 雲南市役所

島根県雲南市木次町里方521-1

雲南市人口：39,934人（2017年1月現在）、高齢化率：36.5%（2015年現在）

島根県の松江市と出雲市の南に位置するまちである。高齢化がすすみ、若者は都会へ出ていき、人口減少が続いている。2004年、大東、加茂、木次、三刀屋、吉田、掛合の6つの町が合併して雲南市となった。6町の合併時、最大の課題はこの人口減少と高齢化による地域活力の低下にいかにしてブレーキをかけるかだった。雲南市だけではない。島根県のほとんどの自治体、全国の大多数の中山間地域が同じ課題を抱えている。としたら、雲南市は単なる課題先進地域ではなく、課題解決の先進地をめざすべきだ。そんな目標を掲げ、速水雄一市長をはじめ、市役所も、市民も、外からの応援者も加わって、全市をあげてこの課題解決に取り組んできた。合併当初からこの取り組みに関わってきた市役所の政策企画部政策推進課の鳥谷健二さんに話を聞いた。

### ■地域コミュニティづくり

地域の活力を取り戻す取り組みは、大人チャレンジ、子どもチャレンジ、若者チャレンジの3つからなっている。

「大人チャレンジ」というのは、住民主



鳥谷健二さん

体の地域自主組織づくりを指す。

高齢化がすすむと、1人で家の中に引きこもったり、自分で買い物に出かけられない人が増える。そうした高齢者を地域で支え合うのは、若い人たちが大勢いた時代には、さほど困難ではなかったが、人口が減り、過疎化がすすみ、隣近所の距離が広がると、その支え合いがうまく機能しなくなった。従来なら行政が手を差し伸べなければならない課題だが、6つの町が1つの市になったことで、地域の隅々にまで行政サービスを行き渡らせるのも難しい。そこで、地域住民による自主組織づくりに力を入れてきた。



地域自主組織でのこんにやくづくり

具体的には概ね小学校区単位で、さまざまな団体・グループによる地縁型の組織をつくり、支え合いを生み出すとともに、地域の課題解決に向けた活動を行う。地域住民の中から選ばれた会長が1人、常勤の事務局長と数人のスタッフがいて、市からの交付金や指定管理料などを財源に自主的な活動を行っている。その中に、より小さな集落単位の自治会、消防団、PTA、老人クラブなどが組み込まれている。

市内に30の「地域自主組織」があり、それぞれに地域福祉、地域づくり、生涯学習などの活動を行っている。たとえば、高齢者の見守り、買物支援、乳幼児や幼稚園や小学校が終わったあとの子どもたちの見守り、あるいは、親子参加のスポーツ大会、蕎麦打ち教室、味噌づくり・豆腐づくりの会、料理教室、健康教室…など。水道の検針もこの自主組織で行っている地域があり、その他、市が保有する公園や温浴施設などの公共施設を地域自主組織が指定管理者となって自主運営しているところもある。



小学生を対象とした土曜日の英語の授業

## ■地域への愛着醸成とキャリア教育

「子どもチャレンジ」は子どもたちの教育の分野である。過疎地の悩みは子育て世代が都会に出て行ってしまい、次世代を担う子どもが年々減っていくこと。そして、地域で生まれた子どもたちも、大きくなると、進学・就職などでやはり地域を離れていくことである。そこで、教育委員会や学校の先生たちが中心となって、子どもたちの地域への理解と愛着を深める活動をはじめた。時には高校生や大学生などのボランティアがアシスタントとして加わっている。

たとえば、学校ごとにバスで市内各地域を訪問したり、夏休みには雲南市民バスの乗り放題チケットを利用して市内を巡り、地域の歴史・文化を学んだり、それぞれの地域で頑張っている大人たちの話を聞いたりする。

最近では、教育系NPOと連携して、中高生が地域に飛び込んでやりたいことを実現するプロジェクト型学習、不登校の子どもの居場所づくり、自分自身や自分の将来について大学生と語り合うカタリバ授業、

大人たちと一緒にボランティア活動に参加する機会をつくるなどのキャリア教育、あるいは、小学校での英語活動による国際的な視野とコミュニケーション能力の育成にも取り組んでいる。

毎年行われている子どもたちへの意識調査によると、こうした取り組みが成果をあげ、地域への愛着や、地域の中で自分が役に立っているという自己有用感が少しずつ向上しているという。

## ■幸雲南塾の開講

大人と子どもの中に位置する若者世代には、地域にとどまって、地域の課題解決に参画してもらいたい。できれば地域に新しい事業を起こしてもらいたい。そこで、「若者チャレンジ」として、2011年から、「こううんなんじゅく幸雲南塾」という地域プロデューサー育成塾を開いた。

全国各地の地域プロデュースに関わっているNPO法人から塾長を迎え、毎月1回、6ヵ月、計6回で終了するコースを毎年開催。これまで6年間にわたって98人の卒業生を輩出している。

塾の中身は、全国の社会起業家として活躍している人たちに講師として来てもらい、その人を囲んで話を聴くというものである。たとえば、自分で酪農をはじめ乳製品の生産販売をはじめた人、地元の食材を使ってレストラン経営をしている人、産直市を立ち上げてつくったお客さんのネット

ワークを利用してさまざまな新たな事業展開をはじめた人…など。

話を聴いた後は講師と塾生たちを交えたディスカッションになる。塾生たちはその中で自分自身が地域のために何をしたいか、何ができるかという目標を見つけ、そのために、何から手を付けるか、どんな人からどんなことを学ばよいか…をつかみとる。

塾の会場は市内の交流センターや古民家を次々回る形で開催され、夜の懇談会には地域住民も参加して交流を深めている。

こうした塾を6回開催し、最後の成果発表会で、塾生たちは1人ひとりが半年間練り上げた事業プランを発表する。発表会には市長をはじめ、地域コミュニティ、商工会、企業や金融機関の代表者も招かれ、その人たちから講評を受け、目標に向かって頑張るよう励まされて塾は終了する。

塾生の半数は雲南市民で、地域のために何か役に立つ活動をしたいと思う若者だが、市民だけでなく、市外からの希望者も受け入れている。雲南市の予算を使って市外の若者を教育することを問題視する意見もなくはなかったが、卒業生たちがUターン、Iターンして雲南市に移住してきてくれれば大歓迎だし、移住はしないまでも、雲南市で学んだことを広めてもらえれば、雲南市の素晴らしさのアピールになり、それがやがて別の形のUターンやIターンにつながるかもしれないことに期待する意見

がそれを上回った。市外からの塾生には熱心な地域活動志望者が少なくなく、市内出身塾生はそれに大いに触発され、塾全体の意識レベルの向上につながっているという。

## ■おっちラボと塾生たちの進路

幸雲南塾における人材育成の成否は、塾生がめざす事業プランに、塾生自身がこれならやれそうという手応えを感じさせられるかどうかにある。そのためには6回の講義とディスカッションの場だけでなく、日頃から塾生の相談に乗り、見守ってくれる先輩の存在が不可欠だった。そのために幸雲南塾の卒業生の数人が立ち上げたのがNPO法人「おっちラボ」である。2013年からスタートし、雲南市からの業務委託によって塾生たちを支援、伴走するために、必要な情報を集め、必要な人たちのとの仲介役を果たしている。

「おっちラボ」の「おっち」は「えっちらおっちら」から来ていて、ゆっくりでいいから着実に前進するよという意味を込めた命名だという。

幸雲南塾の卒業生はこれまでに98人。卒業後の取り組みは次のとおりである。

### [起業7件]

- 中間支援NPO法人「おっちラボ」
- ペットグッズの商品化
- 雲南市産品等のネット通販ショップ
- カフェ開業
- 憩いの場（カフェ）



幸雲南塾のディスカッション風景

- 訪問看護ステーション
- 多文化共生事業

### [家業承継3件]

- 漬物店
- 養鶏業
- クリーニング業

### [その他の活動]

- 地域の図書館
- ものづくりの魅力発信
- 弁当配達業者と連携した高齢者見守り事業
- 地元産コシヒカリで酒造り
- 雲南医療体験ツアー
- 空き家をリノベーションしてシェアオフィス開設
- 子どもの自然体験
- 地域を語る集い
- 伝統文化保全
- Iターンして病院へ就職
- Iターンして就農…など

## ■訪問看護ステーション・コミケアの開設

塾生による起業事例のひとつに「訪問看護



訪問看護ステーション・コミケアのスタッフ

「訪問看護ステーション・コミケア」がある。広島と神奈川と東京の病院で看護師として働いてきた3人が、幸雲南塾で学んだのを機に雲南市内で訪問看護ステーションを立ち上げたものである。

3人のうちの1人は、病院で亡くなった祖母が生前「ウチに帰りたい」と言っていたことが、そのきっかけになったという。余命短い人が「ウチに帰りたい」と言ってもそれを叶えてあげるのは無理だと思っていた。体調のチェック、点滴、注射などは病院でしかできないと思っていたからだ。しかし、訪問看護ステーションを立ち上げて、そこから看護師が利用者宅を訪問する体制をつくれれば、病気の人も障害を持った人も最後の時間を家族とともに自宅で過ごすことができる。自分たちでそれをつくりたい。そのきっかけをつかみたいと幸雲南塾に入塾し、他の2人の塾生とともに雲南市内の医療過疎地域に訪問看護ステーションを立ち上げた。

松江・出雲に近い市の北側には総合病院があり、その病院が開設した訪問看護ステ

ーションがあるが、広島県との県境に近い南の中山間地域には1軒もなく、その地域ではじめての訪問看護ステーションだった。

立ち上げに際しては、おっちラボの仲介で、東京の訪問看護ステーション経営者から経営の手ほどきを受けた。また、市内の病院と連携し、各地域で健康相談会を開催して、訪問看護ステーションオープンのPRに努めた。最近では後に続く高校生たちに自分たちの活動を伝えており、介護やりハビリの専門家との連携にも取り組んでいる。

2015年のオープンから1年半を経たいま、訪問看護ステーション・コミケアの従業員は3人から7人にまで増え、利用者総数は88人に上り、5件の在宅でのお看取りを経験している。

### ■3つの活動の連携を深める

合併当初からはじまった「地域コミュニティづくり」が2013年に第1回プラチナ大賞（特別賞）を受賞。「幸雲南塾による若者チャレンジの取り組み」も2016年に第4回プラチナ大賞（大賞・総務大臣賞）を受賞し、雲南市の取り組みは全国的に知られるようになった。

そのこともあって、雲南市の取り組みは、全国の他の中山間地域に大きな影響を与えている。幸雲南塾の卒業生たちが関わって、新たに地域プロデューサー育成塾をスタートさせた地域は東北、北陸、中四国など14カ所に上る。

さらに、雲南市にはさまざまな能力を持ったプロフェッショナルたちが移住してきている。総務省による地域おこし協力隊制度（中山間地域の課題解決のために都会からの一定の能力を持った人たちの招聘<sup>しょうへい</sup>を国が支援する制度）の活用も加わり、たとえば、医師、ITの専門家、高校生の学習サポートの専門家、そしてもちろん、おうちラボやコミケアを立ち上げた幸雲南塾の卒業生たちもそうである。

道路をつくり、橋を架け、箱モノをつくることが中心だった行政の役割を、雲南市は大きく転換し、人を育てることで人と仕事を呼び込み、それによって地域に活力を呼び起こそうとしている。

今後の課題として、鳥谷さんは次の5つをあげた。

- 「大人チャレンジ」「子どもチャレンジ」「若者チャレンジ」の3つの活動の連携を深めること。
- 「子どもチャレンジ」の中の高校生に向けた取り組みを強化し、「若者チャレンジ」と「大人チャレンジ」つなげていくこと
- 地元の産業界や金融界との連携をつくり出すこと
- 意欲ある大学生の育成・確保に向けた取り組みをレベルアップさせること
- 市外から呼び込んだプロフェッショナル人材との連携をさらに強化すること

取材・執筆 山口 幸正（やまぐち ゆきまさ）

《プロフィール》

外資系食品製造業人事部勤務の後、産業教材出版業勤務。全国提案実績調査を担当し、改善提案教育誌を創刊。1985年に独立し創意社を設立、『絵で見る創意くふう事典』『提案制度の現状と今後の動向』『提案力を10倍アップする発想法演習』『提案審査表彰基準集』『改善審査表彰基準集』『オフィス改善事例集』などの独自教材を編集出版。40年にわたって企業・団体の改善活動取材。現在はフリーライター。

●創意社ホームページ <http://www.souisha.com> 「絵で見る創意くふう事典」をネット公開中